The Japan Society of Educational Sociology

課題研究報告

III　教育研究における質的方法の可能性

司会者　山田　浩之（広島大学）
倉石　一郎（東京外国語大学）
報告者　高井良健一（東京経済大学）
白松　賢（愛媛大学）
山田　富秋（松山大学）
討論者　北澤　毅（立教大学）

1996年度，1997年度の課題研究において「方法としてのエスノグラフィー」「スクール・エスノグラフィーの可能性」というテーマで教育社会学での質的研究法が検討された。それから10年を経て，教育社会学での質的研究は拡大し，また方法も多様になっている。そこで本課題研究では，これまでの質的方法に関する議論の成果を受け，その後の社会学および周辺領域の新動向を取り込みつつ，教育社会学での質的方法の可能性について検討を行った。

まず司会の倉石一郎氏による趣旨説明が行われた。倉石氏によれば，上記のように近年の教育社会学における質的研究はナラティヴ・アプローチやアクティヴ・インタビューなど，多様な拡がりが見られる。しかし，これまでのような社会学や文化人類学などからの借り物ではなく，教育研究というフィールドから発信できる質的方法を見いだすことが必要である。したがって本課題研究は先の課題研究で議論されたエスノグラフィーだけでなく，ライフヒストリーや，学校・授業以外を対象としたフィールドワークの最前線に立つ研究者により質的方法の多様性を追求するとともに，教育社会学外部の方の視点で教育社会学の質的研究を批判的に検討し，教育社会学におけるこれからの質的研究の方向性を探るものである。

第一報告者の高井良健一氏は「教育研究におけるライフヒストリー法の可能性と課題」をテーマとし，自身のライフヒストリーに重ねながら，ライフヒストリー研究の重要性と課題を指摘した。高井良氏は大学院生時代から実証主義的なライフヒストリーに関心を持ち，研究を進めてきた。しかし，これまでライフヒストリー研究を続けるうちに，インタビューで得られる資料のおもしろさに強く惹かれる一方で，実証主義的なスタイルに対する疑問も感じ続けてきたという。それゆえ近年は，聞き手と語り手の相互作用により生み出されるライフストーリーへと高井良氏の関心は変化している。だ

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

が，とくに教師のライフストーリー研究を進める上では，語り手との相互作用をいかにテクストとしてまとめるのかが氏の現在の課題であるとされる。このような課題はあるものの，インタビューの相互行為全体をとらえようとするライフストーリーは教育改革に揺れる「教師の物語」を力づける可能性を持つものである。

第二報告者の白松賢氏は「若者文化のフィールドワーク経験から：「ドラッグ」「VIP カー」を事例として」というテーマで報告を行った。白松氏はこれまで行ってきた「ドラッグ」「VIP カー」研究の事例を紹介しながら，フィールドにおける調査者の位置やメンバーとの相互作用の刻々とした変化が，調査をより豊穣なものとすることを指摘した。その一方で，フィールドに耽溺し，調査者とメンバーとの距離が近くなりすぎることで，メンバーからの過剰な関与や，メンバー内の対立に巻き込まれるなど新たな困難に直面する可能性を紹介した。このような調査経験にもとづき，フィールドワークの成果をまとめる際に，相互作用の過程，調査者の印象や感想のディテールをテクスト化することの重要性を主張した。

第三報告者の山田富秋氏は「質的研究の現状と課題」として教育社会学での質的研究を批判的に検討し，自身の調査経験などにもとづき社会学における質的方法の最前線を紹介した。山田氏は教育社会学において質的調査が広がる一方で，調査方法や立場が明示されないものがあることを批判的に指摘した。その上で，病院などでの調査経験を紹介しながら，リフレクシブ・エスノグラフィーの重要性を提唱した。つまり，方法論を隠したり，自明視したり，理論によって正当化するのではなく，むしろそれ自体をエスノグラフィックに顕在化させ，他者と相互行為する「自己」の足取りをリフレクシヴに再検討する必要がある。

以上の 3 氏の報告を受け，討論者の北沢毅氏から問題点の指摘と，氏の立場から質的研究の方法について提言がなされた。北澤氏は，まず今回の報告の方法と結論はいずれも似ており，質的方法の多様性を検討するにはさらに言説分析，会話分析，映像データの分析なども射程に入れる必要があることを指摘した。また，「対話」が 3 つの報告に共通したキーワードになっており，そこではいずれも山田富秋氏が主張したリフレクシヴな視点が問題にされていることを示した。調査を行う上で「研究者が立てる外部など無い」という考え方は現在の質的研究のコンセンサスとも言える立場にもなっており，調査対象のみを切り取って「客観的」な視点で論述する「素朴な実在論」には戻ることはできない。それならばリフレクシヴに「書いている私」をいかに取り込みながら書くことは可能なのか。リフレクシヴィティを追求すれば実際に調査を公表するための記述において限界があり，調査の流れを止めて「書く」ことが重要ではないか。すなわち北澤氏の報告者への問いかけは，リフレクシヴに書く私をさらにリフレクシヴに見ることへの疑問であった。

これに対する報告者の回答の一つは，白松氏の言う「なぜ」をフィールドの中で問うことをやめ，フィールドで生じた

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

ことを写実的に書くことである。実証的な因果関係でフィールドをとらえるのではなく，ありのままに自身の考え方の変化をも含めて記述することでリフレクシヴな記述が可能になる。また，山田富秋氏は自分が着目した概念やカテゴリーをいかに見つけてきたのか，またそれらが当事者にとっても説得力を持つと言える理由を明確に記述することが必要であると指摘した。

その後，フロアとの質疑に移った。質疑で問題が集中したのは北澤氏の投げかけた問いと同様に，いかにリフレクシヴに書くかということであった。調査者の介入によって対象が変化することをいかに記述すべきか，そこでの相互作用なども含んで記述すべきなのかという質問も提示された。それについて，白松氏は調査の手続きなどを含め実態を記述することの重要性を指摘し，また北澤氏はフィールドに調査者が入ることにより，対象が調査者をいかに意識し，ふるまうのかを記述することが必要であることを述べた。その他にも調査データの扱いや調査者の持つ権力性，さらにはライフストーリー・データの信頼性などについて質問が提示された。これらの質問に報告者の3名を中心に回答をした後，司会の倉石氏が，教育社会学研究におけるさらなる質的研究の充実と，その方法論に関する議論の重要性を確認して締めくくった。

本課題研究では，高井良氏のライフストーリーへの関心の変化，山田富秋氏の教育社会学での質的研究に対する批判など，教育社会学における質的研究をあらためて問い直すことになった。さらにたんなる調査手法の紹介にとどまらず，調査の結果をいかに記述し，テクストとしてまとめるかという実践的な議論ができたことでも大きな成果があったと言えよう。その一方で，議論の中心となったリフレクシヴィティなどはすでに多くの議論がなされているものでもあり，方法論の斬新さとしては物足りないものであったかもしれない。また，北澤氏の指摘にもあるように，報告者の論点が一致してしまい現在の質的方法の拡がりをカバーできなかったことも確かである。今後，質的方法の範囲を拡げることで，さらにその多様性を検討するとともに，教育社会学の領域における質的方法に関する深い議論を行うことが課題といえよう。

（研究部：山田浩之）

NII-Electronic Library Service